

研究教育活動

## 星槎国際高等学校沖縄学習センターにおける アクティブ・ラーニング

比嘉 貴文<sup>1</sup>・天野 一哉<sup>2</sup>

Active Learning at the SEISA International High School Okinawa Center

HIGA Takahumi<sup>1</sup>・AMANO Kazuya<sup>2</sup>

はじめに 星槎国際高等学校沖縄学習センターで取り組んだアクティブ・ラーニングの一つである Project-Based-Learning (以下 PBL) について実践報告を行う。本学習センターを開設した 2004 (平成 16) 年から取り組んできた PBL は、2011 (平成 23) 年には星槎大学教授の天野一哉と共同で研究することとなった。当初からの課題であった「学習における質の向上」が、天野からの助言・指導により、主体性と汎用的スキルを養う PBL へと発展することができた。本稿では、PBL の課題と対策を論じる。

### 1. 沖縄学習センターの授業形態

学校法人国際学園星槎国際高等学校沖縄学習センターは、単位制通信制課程の高等学校である。単位修得には、①レポートの提出、②試験の合格、③年に約 10 日以上スクーリング受講という 3 点の要件がある。本校では週 2 日以上 (年間 60 日以上) のスクーリングを設け、生徒が毎日でも通える学校を作った。発達段階の極めて重要な時期に、「人を認める」「人を排除しない」「仲間をつくる」という星槎の理念をもとにした「人との関わり合い」を通して、体験的に学習するためである。こうしたなかで、多様なニーズを持つ生徒たちへ、既存の学習にとらわれない授業を展開してきた。

書道芸術家、茶道の先生、プロのミュージシャンによる音楽指導や、アーティストによる芸術の授業、農家の方による「つぎ木体験」など、さまざまな体験学習を数多く実施してきた。教科授業に加え体験学習を多く盛り込み、生徒の個性をより伸ばせるよう、時間割を毎年のように改訂した。表 1 は 2015 (平成 27) 年度の時間割である。

月～水曜日は各学年に分かれて登校する。もう 1 日は木曜日と金曜日のどちらかを選択する。これにより週 2 日登校、希望者は木・金両方に登校するなど週 2 日以上登校を基本とする時間割となっている。木・金は全学年対象となるため、異学年 (いろいろな学年) で授業

<sup>1</sup> 星槎国際高校沖縄学習センター (前センター長)

<sup>2</sup> 星槎大学共生科学部

表1 星槎国際高校 2015 年度時間割

	月	火	水	木	金	土
登校学年	3年	2年	1年	全学年 木曜選択生徒	全学年 金曜選択生徒	社会人 月1コース
1	教科授業			芸術 体育 グリーンライフ ボランティア 情報		
2						
3						
4	PBL	PBL	ATT (総合学習)	【コース授業】	【コース授業】	
5				・音楽 ・IT ・表現 ・スポーツ ・美容	・農業 ・木工 ・アート ・テキスタイル ・	

PBL と体験学習を多く盛り込んだ。

を受けることになる。

生徒が学習内容を自由に選べるように設定し、自身の興味・関心を伸張できる授業とした。さらに、学習内容を選択できることにより、時間管理能力や計画能力、さらに、選ぶ (=自由に選択)責任感から、取り組みの姿勢にも変化が現れた。スタートした当初は混乱もあったが、自身の進路につながるように選ぶなど、内容を楽しみながら選択する生徒も増えていった。このように、学習の自由の幅を広げることにより、主体的な学習の達成を目指した。

## 2. 「調べ学習」から PBL へ

本学習センターは開設当初より、PBLにつながる学習を行ってきた。「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を生徒が決定するという学習である。当初は生徒たちが最後までやり遂げるかどうか不安もあったが、予想以上に生徒の反応もよく、A4用紙8枚のレポート執筆とプレゼンテーションに積極的に取り組んでいた。その様子から手応えを感じ、毎年取り組むきっかけとなった。2005(平成17)年にはネットや本からの情報だけではなく、必ず「生」の情報を得ることを必修とした。「生」の情報とは、例えばインターンシップやアンケート調査、インタビューなど自分たちで直接調べた一次情報である。その効果が出て、学習の内容が広がりを持つようになった。

2008(平成20)年にはプレゼンテーション大会として順位をつけ、表彰も行った。2009(平成21)年には市民劇場を借りてプレゼンテーション大会を行った。本格的な舞台上でのプレゼンテーションは、緊張感と達成感により生徒の成長をより大きく促したもと確信している。2012(平成24)年からは星槎大学の天野との共同研究が始まり、課題としていた「省

察」を行うことで、「成果（良かった点）」、「課題（うまくできなかった点）」「改善策」などを発見し、解決する機会を作ることができた。それにより、本やネットの内容を写して終わる表面的な「調べ学習」を脱し、深みのある学習を行うことができた。

2013（平成25）年には、年に1回から前期1回、後期1回の計2回のプロジェクトを行うことにより、1回目のプロジェクトでの課題を2回目のプロジェクトで解決することができた。また、自己評価を行うことにより、前期と後期を比較することができた。2015（平成27）年からは学習成果を進路活動の自己アピールに活かすために2年生から実施することとした。成果がでるか不安であったが、予想以上の結果が得られた。

### 3. PBLの概要と実施

PBLの概要は次の通りである。①テーマ設定・グループ決め、②調査・執筆活動、③プレゼンテーション、④プロジェクト全体の省察、⑤省察で明らかになった課題について解決策を立てる。これが基本的な流れとなる。その一連の流れを3年生の年に前期（4月～7月）に1回、後期（9月～1月）に1回の計2回実施する。1度で終わるのではなく、同じテーマを繰り返して内容を深める、新しく興味を持ったテーマにつなげるなど永続的な学習を目指している。

#### 1) テーマ設定

テーマ設定については、生徒自身の興味・関心・必要性から決定する（表2参照）。自身の進路に活かすために選ぶ生徒もいれば、趣味・特技からテーマを設定する生徒もいる。先輩たちのプレゼンテーションを見て、このテーマをやりたいとすでに決めている生徒もいる。しかし、なかなかテーマが決まらない生徒も少なからずいる。その場合は、簡略化したKJ法を使ってブレインストーミングをし、テーマに導いていく。それでも学習初期段階においては、テーマを設定できない場合があり、その場合は担当職員との対話により、決定していく。

テーマ設定一つにおいても、自身にどのような興味関心があるのかを探る、深い学習がある。メタ認知の向上にもつながるであろう。たいてい1度プロジェクトを経験すると、次はこのようなテーマにしたいとイメージできるようになる。

表2 テーマ一覧

興味関心	ダイエット、メイク、接客と心理学
進路活動として	クッキング、音楽、スイーツ
時事	中国ゼミ、沖縄の観光ゼミ
社会問題	依存症、タバコ、食品添加物
職員の提案によるテーマ	調理ゼミ、ゆいレールゼミ、段ボールゼミ

テーマ設定は自己との対話である。

写真1 簡易版 KJ 法にてブレインストーミング



勉強の概念にとらわれず、自由に発想させる。

## 2) グループ決め

グループ決めは、OECD のキー・コンピテンシーにある「異質な集団」で関わる力を育むために、なるべく男女混合で、さらには日頃から仲の良い友人同士ではなく、普段関わりが少ない生徒同士が望ましいと方針を伝えている。しかし8割は仲の良い友人同士でグループが決まる。

このグループ決めの際においても多くの課題が見えてくる。単なるグループ決めではなく、人間関係や自己形成等の文部科学省が策定した「汎用的能力」に関係する一連の学習がある。

## 3) 調査

調査では「生」の情報を得ることが絶対的条件となる。インターネットや本の情報だけに

写真2 接客と心理学（企業インタビュー：NBC プライダル）



リハーサルを何度も重ね本番を迎える。

偏らず、自身の目で確認し、生きた情報を得ることが大事であると学ぶためである。

例：インターンシップ、インタビュー、アンケート調査、ものづくりなど

#### 4) 論文、レポート

執筆活動において、当初は手書きの生徒も多かったが、現在は全員が PC での執筆となっている。論文の枚数は A4 用紙 8 枚以上である。引用には文章の体裁や参考文献の記載があるかなど、担当職員のチェックを受ける。

#### 5) 活動ごとの省察

プロジェクトの活動ごとに記録をつけ、省察を各グループにて行う。どのようにうまくいったのか、もしくは、なぜうまくいかなかったのかなど課題を発見し、ではどのようにしたらうまくいくのか、解決策を見つける。また、中間進捗発表として全グループが集っての省察も行う。現在どこまで進んでいるのか、このようなところで困っているなどを発表する。それを聞いて、他のグループが賞賛やアドバイスを提供する。

「調べ学習」から「PBL」へと飛躍的に発展した大きなポイントが省察である。特に全体での中間進捗発表は、発表を聞いている側も同じような課題を持っていたり、他のグループの進み具合や完成度を目の当たりにして焦るグループがあったりなど、気づきや学びが多い。この部分でも主体的な学習は非常に大きい。生徒同士の学び合いの場となった。

#### 6) プレゼンテーション

プレゼンテーション大会は、市民会館や劇場などを借用し、照明や音響なども準備して本格的な会場で行う。発表時間は 1 プロジェクトあたり約 8 分。これまで調査・研究した膨大

写真 3 プレゼンテーションの様子



病気ゼミ：さまざまな病気をドラゴンボールのキャラクターに扮し表現、健康の大事さを訴えた。

な情報から「何を伝えたいのか」をまとめ、「どのようにしたら伝わるのか？」と、発表の方法を創意工夫する。2部構成になっており、リハーサルも兼ねたお昼の時間帯の発表では在校生が聞く。その後、本番であり一般客も来場する夕方の発表に向けて、休憩時間を活用し、うまくいったところ行かなかったところを振り返り、短い時間で創意工夫を加え再構成する。生徒達の一連の行動は自発的に行われ、PBLの目指す主体的な学習の成果が表れた。

#### 【会場からのアンケート例】

- ・皆、個性があり、自分で興味を持った色々な方向から調べ学習していて素晴らしかった。
- ・全部楽しく観られて飽きなかった。自発的で生き生きしていた。
- ・発表会ではなくエンターテインメントを観に来ている感覚になりました。

#### 【生徒アンケート】

- ・来年は自分たちの番だから真面目に取り組み、わかりやすく面白く説明できたらいいな。
- ・3年生が色々なことを調べていて、色々なことを知ることができて良かった。

### 7) プロジェクト全体の省察

プレゼンテーションが終わると、後日、時間をかけて省察を行う。PBLの中で一番大事な場面であり、このためにプロジェクトを行っていると言っても過言ではない。なぜなら、成果と課題がこのプロジェクトのみで終わるのではなく、これからの人生のあらゆる場面において活かせることが大事だからである。成果と課題には、学習者自身が見えているものもあれば、見えていないものもある。そのためにグループの評価、個々の評価、他者の評価、自己評価が重要となってくる。

学年全体での省察では、各グループが簡易版KJ法を用いて、良かった点と改善点を付箋紙に記入する。それをグループ内で発表し合いながら、グループ毎の良かった点と改善点を全体場で発表する。

### 8) 追跡調査

PBLの効果を検証すべく、卒業した生徒を対象にアンケート調査（表3参照）を行った。経済産業省の社会人基礎力を参考に、身につけたい力にチェックする方式をとった。

- ・実行力、質問力、発信力、基礎学力、創造力、表現力、傾聴力、協調する力
- ・柔軟に対応する力、発信力、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力
- ・計画力、課題解決能力、国語、文章力、パソコンタイピング、プレゼン力
- ・コミュニケーション力、諦めない力、失敗する力等

今回のアンケート調査は卒業生約600名の内の一部の調査であり、また、経済産業省の社会人基礎力を参考にした項目では、身についたと思う項目の具体的な根拠を調査するまでには至らなかった。しかしながら、実行力や表現力、協調する力など、当人たちの中には成果が残っていることも事実である。現在の姿がすべてPBLの成果とは言えないが、「汎用的能力」

表3 PBLの追跡調査

生徒	進路等	PBLで得た力
生徒A	短期大学	情報を把握する力、プレゼン力、計画力
生徒B	大学	情報を把握する力、プレゼン力、計画力
生徒C	専門学校	柔軟に対応する力、文章力、協調する力
生徒D	企業	実行力、発信力、表現力、傾聴力、協調する力、状況把握力、ストレスコントロール力
生徒E	大学	計画力、諦めない力
生徒F	企業	積極性、度胸
生徒G	看護学校	情報収集力、発信力、タイピング、文章力、創造力
生徒H	企業	実行力、質問力、柔軟に対応する力、計画力
生徒I	企業	実行力、表現力、協調する力
生徒J	企業	実行力、発信力、創造力、表現力
生徒K	専門学校	質問力、課題解決能力
生徒L	自営	コミュニケーション力

卒業生たちの自己評価

を、PBLをきっかけに日常生活で実践し、身につけている、またはその逆も考えれば相互作用的に身につくものである。したがって、日常化され普段は無意識になった「汎用的能力」こそ本来身についたと言えるのである。だからといって放置するのではなく今後はその部分のさらなる検証が必要である。

#### 4. 星槎大学との連携によるICTを活用したPBLの広がり可能性

##### 1) 星槎国際高等学校全国一斉授業

2012 (H24) 年度より、TV会議システムを活用し、星槎国際高等学校の全国の学習センターが一斉に授業を行う「全国一斉授業」がスタートした。毎年1つのテーマを決めて行われる。年度内に5月、6月、11月と3回構成で授業を行う。各回とも500名を超える生徒が授業を受ける。

##### 2) 2015 (H27) 年度「地域の課題解決」

2015 (H27) 年度の大テーマは、よりのを絞り、各校舎の特色がでるようにした(表4参照)。21校舎を全国4つのブロックに分けて予選を設けたことにより、全校舎がプレゼンテーションを実施できるようになった。審査員は星槎大学の教員に依頼し、実施した。

- ・テレビ会議システムを利用しプレゼンテーションを行う
- ・プレゼンテーション時間：10分以内
- ・質疑応答：5分程度

- ・ 審査員：星槎大学教員 5 名～7 名
- ・ 予選 1 位は、全国本戦に出場して全国 1 位を決める（表 5 参照）

表 4 主なテーマ例

校舎名	オリジナルテーマ
郡山	規格外ベビーリリーフの活用
福井	福井の伝統工芸品を失わないために
厚木	街の落書きを無くし、犯罪もなくそう！
沖縄	21 世紀環境問題解決に向けて

大テーマの「地域の課題解決」を踏まえオリジナルテーマを設定する。

表 5 本戦

順位	校舎名	審査員評価例 ※一部抜粋
1 位	郡山	テーマが焦点化され、調査もよくできています。プレゼンもストーリー性があり、素晴らしい。
2 位	厚木	行政と連絡を取り、自分たちで落書きを消してゆく活動はとても良かったと思いますし、落書き防止のための壁画もよかったです。
3 位	仙台	テーマを選んだ理由が明確になっていて話がわかりやすい。データをどこから取っているか示しているが、そのデータの信頼性についても言及してほしかった。

表 6 経済産業省の ATT の力を参考にルーブリックを作成し実施（一部抜粋）

経済産業省の ATT	生徒たちの省察
ACTION	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 仙台市の児童虐待が全国に対してどのくらいあるか知りたいと思った。</li> <li>・ 犯罪統計資料が発表できなかったのが残念だった。</li> </ul>
THINKING	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の頭で創造しながら発表を聴くことができた。</li> <li>・ 自分達に何ができるか考えさせられた。</li> </ul>
TEAM WORK	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 質問に対し皆で柔軟に対応することができた。</li> <li>・ 周りの人と意見交換ができた。</li> </ul>

省察をすることにより次の学習活動につなげる。

沖縄学習センターで確立した PBL を、遠隔地の校舎同士、そして大学との連携により多くの成果を得ることができた（表 6 参照）。今後の可能性として、審査員に企業関係者を招いたり、テレビ会議システムを活用し離島、または海外の生徒とも実施したりすることができる。ICT を活用した PBL の可能性として今後も協力していきたい。



## 5. PBLの問題点解決策

### 1) ショート・ショートPBL、これから導入する方法について

これからPBLを導入したいがどのようにしたら良いかわからないという場合に、「ショート・ショートPBL」を提案する。通常、1ヶ月から半年以上の時間をかけて実践されるが、それを4時間程度に短縮したバージョンである。

- ① 説明：15分
- ② アイスブレイク：15分（心と身体のウォーミングアップ）
- ③ テーマ・グループ・ループリック決め30分
- ④ 調査：1.5時間
- ⑤ プレゼン：1時間、1チーム5分程度（チーム数により調整）
- ⑥ 振り返り：30分

短縮することにより一連の流れを体験でき、自身のやり方を見つけられる。また、時間が短いことで、思いがけないアイデアをも得ることができる。

強く協調したいポイントは「十分に楽しむこと」と「失敗すること」である。ショート・ショートの目的は、授業でどう活用するかである。したがって、失敗することにより課題の発見・解決まで体験できるのである。また、何よりもショート・ショートPBLを実施するほうも体験する方も、学習から離れて楽しむことである。そうすることで、PBLの広がりを感じることができる。日頃遊びと学習は乖離していると思いがちだが、「漫画の『ワンピース』と学習」というテーマで実践した際には、モチーフであるアニメが友情や世界史などと繋がっていることがわかった。

### 2) 「中だるみ」や「慣れ」の改善策

PBLを実践していくにつれ、生徒も教員も「中だるみ」や「馴れ」が生じてくる。その対応例を示す。

＜教員によるPBLのこと＞

日頃と逆の立場にたつ。調査・プレゼンテーションの評価は生徒たちが行う。教員が楽しそうに発表したり、四苦八苦しながら発表したりする様子を見ることによって、刺激が生まれる。また、生徒が評価する立場になることにより、メタ認知の向上にも役立った。

### 3) 論文を書くこと、プレゼンテーションをすることが目的化する

PBLの本来の目的は、自身の日常に活かすことである。したがって学習を「楽しい」「成果が得られた」と実感できなければならないが、2回目以降に論文を書きやすい、プレゼンテーションをしやすいテーマにしようとする傾向のグループもでてきた。その場合の対策として、先にフィールドワークを行い、どのような点が面白かった、楽しかったのかを見つける。そして、なぜ面白かったのか、楽しかったのかを深く掘り下げ学習との関連性を持たせる。

## 6. まとめ

### 1) 生徒自身が「どのように学ぶ」を選択することにより、主体的な学習が実現できた

学習の最終目的はより良い人生を生きることである。偏差値の高い大学に入学することでもなく、大企業に就職することでもなく、平均寿命の約 80 年続く人生をいかによりよく生きるかである。何が良いかは個々の価値観によるが、価値観を形成しその価値観に向かっていくことが生涯学習であり、本来の学習である。

つまり「いかに自由 = 自律学習 = 生涯学習 = 生き方作り」である。

### 2) 慣れから受動的な学習に陥る

PBL を繰り返し行うことにより PBL が上達する。パワーポイントの作成、プレゼンテーションでのトークなど向上していく。そのような技術の向上も PBL を実施していく上で非常に有益な学習の一つである。しかし、当人たちが何を学んだのかが伝わらないことが起きる。繰り返し行ったことで、慣れてしまい、学習が深まっていない状態に陥る。一見するとプレゼンテーションが上手なので良い学習ということもできるが、当人たちの中で深まった学習ができていなければ本来の目的からずれている。逆に言えば下手なプレゼンテーションでも、論文がうまくかけなくても、生徒個々の学習が深まっていることが重要なのである。

### 3) 今後について

比較的少人数を対象とする PBL は実施することができた。今後の取り組みとして、多くの教員の参考になるように、40 名クラスの 50 分でできる PBL を研究していく。それには台湾で視察した「小さい先生」が参考となる。また、ループリックにも取り組んだが確立した評価方法まで達することはできなかった。そこはミネソタ・ニューカントリースクールを参考に、学習の一環としての評価方法を研究する。

## 参考文献

- 苦野一徳 (2014). 『教育の力』, 講談社現代新書.  
久保田賢一 (2000). 『構成主義パラダイムと学習環境デザイン』, 関西大学出版部.  
小林昭文 (2015). 『アクティブ・ラーニング入門』, 産業能率大学出版部.  
松下佳代 (2015). 『ディープ・アクティブラーニング』, 勁章書房.  
立田慶裕・平沢安政監訳 (2013) 『学習の本質』, 明石書店.  
上杉賢士 (2010). 『プロジェクト・ベース学習の実践ガイド』, 明治図書.